悠久の名作シリーズ（2）

『春望』杜甫

「春望」と「奥の細道」（芭蕉）

春望　杜甫

國破山河在　國破れて山河在り
城春草木深　城春にして草木深し
感時花濺涙　時に感じて花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　別れを恨んで鳥にも心を驚かす
烽火連三月　烽火三月に連なり
家書抵萬金　家書萬金に抵る
白頭搔更短　白頭搔いて更に短かし
渾欲不勝簪　渾べて簪に勝えざらんと欲す

【語句の意味】

国破れて　安禄山の反乱によって国の都長安がおちて宮殿や町などが破壊され、荒れ果てることをいう

在り　厳として存在するという強い意味がある

城　城壁に囲まれた長安の町

時　時世のありさま

心を驚かす　はっとして心をいたましめる

烽火　戦いを知らせるのろし

三月　三ヶ月もの長い間　陰暦の三月をさすという説もある

家書　家族からの手紙

抵る　相当する　値する

渾べて　まったく　まるっきり

簪　かんざし　外からまげにさし冠を固定させるピン

【詩の意味】

戦乱によって都長安は破壊しつくされたが、大自然の山や河は依然として変わらず、町は春を迎えて、草木が生い茂っている。

時世のありさまに悲しみを感じて、（平和な時は楽しむべき）花を見ても涙を流し、家族との別れをつらく思っては、（心をなぐさめてくれる）鳥の鳴き声を聞いてさえ、はっとして心が傷むのである。

うちつづく戦いののろしは3か月の長きにわたり、家族からの音信もとだえ、たまに来る便りは万金にも相当する

ほどに貴重なものに思われる。

心労のため白髪になった頭を掻けば一層薄くなり、冠をとめる簪もさすことができないほどである。

【「春望」が作られた時代と杜甫】

「春望」は、至徳2年（757）杜甫46歳、安禄山の軍にとらわれ、長安で幽閉2年目の作である。安禄山は天宝14年（755）楊貴妃の一族である姦臣楊国忠を徐くという大義名分のもと15万の大軍をひきい、范陽を発し、至徳元年（756）長安を陥れる。玄宗は逃亡の途中で家臣の要求に屈し、宰相楊国忠と愛妃楊貴妃を殺し、やっと四川の成都に落ちのびることが出来た。その折り止って賊を打つことを命ぜられた太子は後、霊武で帝位につき粛宗と称した。杜甫は、家族の疎開先鄜州から粛宗の行在所のある霊武に駆けつけようとして、途中反乱軍の手に落ち長安に拘禁される。

安禄山の軍は東北民族出身の者が多く、武勇は優れているが、占領地の行政を運用する能力に欠け、略奪をほしいままにしたので民心を失い孤立していく。

杜甫は「春望」を書いた年の4月、長安を脱出し、粛宗の臨時政府が置かれていた鳳翔に馳せつける。この功績を愛でられて、杜甫は左拾遺の官職を授けられた。はじめて経験する役職らしい地位である。しかし、官職についた同じ月に宰相を罷免された房琯を弁護して、粛宗の怒りに触れ、危うく罪を得そうになるが、宰相張鎬の取りなしにより、現職に留まる。そして、家族思いの杜甫は、勅許を得て鄜州にある家族のもとへと旅立つ。

同じ年の至徳2年10月粛宗は長安を奪回し、長安に帰還する。同年11月杜甫も家族を伴い長安に帰る。同年12月玄宗も長安に帰る。

【鑑　賞】

この詩は、杜甫の代表作で、ことに首聯は特に有名である。この詩の一番の魅力は戦乱による家族との別離と肉体の衰えという個人的な悲しみを、破壊された国と人々の生活を憂うる心情に重ねる形で結晶させ、社会性を兼ね備えた重厚さにある。

次に杜甫の詩集をいつも携え旅をしていた松尾芭蕉がこの「春望」をどのように読んでいたのかを「奥の細道」を通して考えてみたい。

(1)「国破山河在　城春草木深」について

「奥の細道」の「平泉」の中に次の記述がある。

『偖も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり　城春にして草青みたり」と笠打敷て、時のうつるまで泪を落とし侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡』

此城とは義経の居館高館（たかだち）のことである。芭蕉はその跡に立って弁慶など忠義勇猛の士の奮戦もむなしく義経主従が滅び去ってしまった悲しみに一刻が過ぎるほど涙したのである。芭蕉は５００年前の義経主従の悲劇の跡と９００年前の瓦礫と化した長安での「春望」とを重ねてとらえていたのである。どちらも戦禍が及んだ跡で、今までとは打って変わり、しんとして人影なく草木のみ青々としている。自然と比べ人の世はなんと不安定で無常なのかと、深く思ったことだろう。ただ「春望」は春、「平泉」では夏。芭蕉は「草木深」を「草青みたり」と改変した。

⑵「感時花濺涙、恨別鳥驚心」について

「春望」の頷連について、昔から2通りの解釈がある。1つは「詩の意味」で書いた涙を流したり、心を驚かす主格は杜甫だという解釈である。鈴木虎雄訳注の「杜甫全詩集」、黒川洋一訳注の「杜甫」、ＮＨＫの漢詩講座、高校の漢文の教科書等もこの解釈である。

もう一つは、主格は花と鳥であって「時世のありさまに悲しみを感じて、花も心をいためるのであろうか、涙をこぼすようにはらはらと散る。また人がちりぢりになってしまった不安な空気の中では、鳥のなき声も何となく不安げである。かく涙を濺ぐのは花であり、心を驚かすのは鳥であるとして、吉川はこの聯を読みたい。」（「新唐詩選」吉川幸次郎）という解釈である。この考えは、室町時代、世阿弥の謡曲「俊寛」にも「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れをも恨みては、鳥も心を動かせり。もとより此の鳥は、鬼界が島と聞くなれば……」とある。俊寛だけが許されず京に帰れない悲しみに、花も涙を濺ぎ鳥も心を動かしているのである。

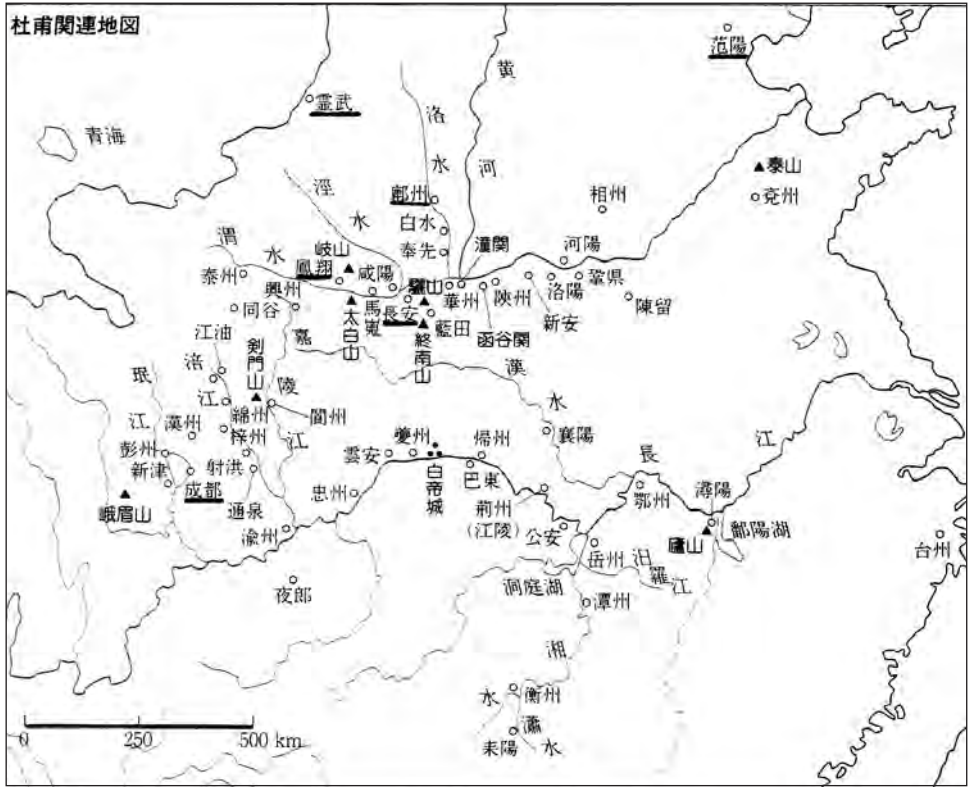
では芭蕉はどのように読み取ったのだろうか。

「行春や鳥啼き魚の目は泪」

この句は元禄2年（１６８９）3月27日芭蕉が奥の細道の旅に向かって江戸を出発し、深川から船を出して門人と共に隅田川を上って千住（せんじゅ）に上陸し、そこで門人と別れた時に吟じた句である。

句の意味は、春との別れを惜しんで、空には鳥が鳴き、水中の魚の目にも涙が宿っている。このように鳥も魚も名残を惜しむ時節に親しい人々と別れてゆく身には、殊更に悲しみが湧いてくるということである。この句は「春望」の頷聯を下敷にしている。「感時」を「行春」に「花濺涙」を「魚の目は泪」に、「鳥驚心」を「鳥啼」に転じている。

国都が破壊された悲しみと芭蕉の場合は親しい友との別れの悲しみ、内容に違いはあるが、発想形式は良く似ている。そして主格は鳥や魚である。鳥や魚を感情のある物として描くという表現から、芭蕉も後者の考えであったと考えられるのではないだろうか。



［参考文献］／「芭蕉と奥の細道論」丸山茂著 新典社／「杜甫と芭蕉」曹元春著 白帝社／「新唐詩選」吉川幸次郎・三好達治著 岩波新書／「観世流謡曲全集」観世左近著 檜書店